

デュルケームの集団的意識による 個人行動の拘束理論と自殺論モデルを用いた 日本における新しい急性アルコール乱用の理解 —大学における飲酒教育の新機軸の構築—

New trails for understanding the acute alcohol abuse in Japan
from the viewpoints of Durkheim's theories, the restriction
of individual behaviors by the collective consciousness
and the typology of features of suicide.
; making a new departure of the education for drinking issues
in the university

横山 裕一*

慶應保健研究, 36(1), 053-060, 2018

要旨：大学でのアルコール乱用防止の目的で、筆者は当大学の学生に対して飲酒の危険性に関する講義を医学・生理学のみならず、歴史学、民俗学などの知見も交え学際的に展開している。しかし、「アルコール乱用は危険なのでやめよう」以上のメッセージを発信できていないのが現状である。今回、学生の飲酒事故は集団内で発生することが多いことから、その理解に社会的アプローチが有益と考えた。デュルケームは社会に形成された集合的意識（collective consciousness；CC）が個人行動を拘束するとしている。そこで、日本に存在する飲酒や危険な行為である一気飲みの肯定・礼賛の背景のCCを同定した。またデュルケームは自殺を4類型に分類し、夫々が違った特徴を持つ社会に起こり易いことを示した。筆者はそれに第5の日本特有の類型を加えることを提言したが、今回、その5つの類型が一気飲みの類型にもなっていることを示した。更に、日本社会に存在する飲酒や一気飲みに関するCCを検証し必要な修正を加えることで、飲酒者の飲酒への意識改革を促すこと、自分の性格の特徴と飲酒をする集団の特徴の関係において飲酒事故が起こり易い組み合わせを想定し、各人がそれを認識すること、が新しい飲酒乱用防止対策（または教育）として機能する可能性を提唱した。特に、後者、即ち、自分と社会の関係を知ることは、教育全般の原点であるとも考える。

keywords：アルコール乱用、一気のみ、集合的意識、デュルケーム、自殺の形態の類型
alcohol abuse, binge drinking, collective consciousness, Durkheim,
classification of features of suicide

*慶應義塾大学保健管理センター

（著者連絡先）横山 裕一 〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1

1. はじめに

近年、本邦の大学における飲酒による死亡事故が問題になっている。アルコール薬物問題全国市民協会（ASK）は2001年～2018年2月まで35人の大学生が飲酒が原因で死亡していることを報告している¹⁾。よってその防止は重要である。本学でも、飲酒の害、特に急性アルコール中毒の危険性に対する問題意識が高まっており、筆者も大学の講義を通して学生に飲酒の危険性を訴えてきた。その講義は筆者が専門とするエタノール代謝の医学・生物学的分野の情報発信に留まらず、歴史学、民俗学、さらには言語学の分野からのアプローチも含む学際的な取り組みであるが、結局「アルコール乱用は危険なのでやめよう」以上の結論を導けないのが現状である。よって新たなアプローチの確立が必要と考えている。

大学における飲酒による死亡事故の多くは集団での飲酒時に起きているという特徴を持つ。上述のASKの報告例では、一例を除き、すべてが集団での事故である。その一例も、原因となった飲酒の状況の記載がないため例外としたが、実際はグループ飲酒をした後の事故の可能性もある。もっとも、個人の飲酒、小グループによる飲酒事故は表面に現れず、報告されてこなかった可能性も否定できないが、学生の集団飲酒時の死亡事故が問題になっていることは事実である。よって、筆者は、学生の飲酒問題のさらなる理解のために、集団と個人の関係からの、即ち、社会学的見地からの考察が可能と考えた。そこで、社会（集団）と個人の行動様式の間を初めて体系化したフランスの社会学者デュルケームのcollective consciousnessによる個人行動拘束の理論²⁾³⁾と自殺論⁴⁾に基づいた飲酒問題へのアプローチを試み、新たな飲酒事故予防のための対策（教育）を模索した。これらデュルケームの理論は本誌に掲載されている別稿⁵⁾で解説した。

2. 現在の大学における筆者の飲酒死亡事故防止への取り組み、教育

筆者は、本大学のいくつかの講義、また、学生課と共同の全学に向けたe-learning形式の講義で、「飲酒の害」についての情報発信を行う一方、塾内で問題飲酒が発覚した場合、そのグループの学生を対象に特別講義を行うことを大学側から要請されることもある。

筆者の講義は、当初、アルコール乱用の危険性、致死性への医学・生理学的アプローチを軸としたもので、急性中毒と慢性中毒を起すエタノールの本質は麻薬の本質と同じであることから始まり、摂取されたエタノールの吸収と代謝、血中エタノール濃度（BAC）の上昇の機序、一気飲みを連続することでBACが急激に上昇する機序、BACの上昇に伴う中枢神経系におけるエタノールの標的の変化および酔いの症状の変化、高いBACで発揮される致死性の本態、アルデヒド脱水素酵素の遺伝的個人差に起因するエタノール代謝の個人差、GABA受容体とNMDA受容体に与えるエタノールの影響、急性エタノール中毒に陥った人の危険性の簡易的な診断方法と正しい介護方法、および救急車要請のタイミング、などで構成されていた。

しかし、年々講義内容を膨らませ、人はなぜ飲酒で命を落とすようになったのか？という命題に対する歴史学的、民俗学的情報発信も行っている。即ち、中性イスラム圏で発達した蒸留の技術により、蒸留酒が作成され、それは当初はaqua viatae（命の水）と崇められ、錬金術師や宗教家の間で欧州全土に広がっていったが、18世紀に英国を中心に起きた産業革命、商業革命の影響で大衆化し、その過程でaqua viataeがaqua ad vitam（命を奪う水；筆者の造語）に変貌してしまった歴史を紹介している。その大衆化の過程で、ポーランド語の命の水、即ち、“voda zycia”の“zycia（命）”がとれ、voda（水）になり、そこにポーランド語の愛称詞kaが語尾につきvodaka（お水ちゃん、筆者訳）になり、それがロシア語のvodka（ウォッカ）の語源で

あること、同様に中世英語の命の水 usque-bae の“bae (命)”がとれ、英語の愛称詞 y が語尾につき usquey となり、それが whiskey (ウイスキー) の語源であること、など、言語学的エピソードも紹介している。さらに、日本社会では本来、酒は晴れ（非日常）の席でのみ飲むものであったが、現在、特に明治時代以降、は藪（日常）にも飲酒習慣が入りこみ、それが飲酒の害をもたらしている可能性にも言及している。

しかし、この学際的アプローチを以てしても、「アルコール乱用は危険なのでやめよう」が講義の結語である。その現状を打破する目的で、筆者は以下に展開するデュルケームの理論に基づいた飲酒問題への社会学的アプローチを試みた。

3. 日本における飲酒および一気飲みに関する collective consciousness の同定

デュルケームは個人の価値観や行動は必ずしも個人が決定しているわけではなく、社会に形成された意識、即ち、collective consciousness が決定する場合もある²⁾としていることを別稿で紹介した⁵⁾。本稿では、飲酒、特に現代の日本において、日本人の飲酒行動に影響を与えていると考えられる collective consciousness の同定を試みた。

エタノールは大量摂取時の致死性と慢性摂取時の依存性を有することから、本質的には法律で禁止されている麻薬と同等の物質である。しかし、一部の宗教、一部の民族を除き飲酒は世界的に容認されている。この危険な行為が容認される背景は、文明の初期から飲酒を行い、その恩恵も受けてきた人類に「飲酒はしても構わない」とする共通の collective consciousness が形成され、個人の価値観がそれに拘束されているためと考える。

日本でも古来より飲酒がなされてきたが、上述のように、日本には独特の飲酒習慣の歴史がある。民俗学、文化人類学の大家、柳田國男氏は古代の日本社会には「藪」と「晴」の循環があっ

たとしている⁶⁾。即ち、「藪（日常）」において人々は粛々と仕事を行うが、その間に活力（靈力）が減ってくるので、「晴（非日常）」の宴席を設け、そこで、活力の回復を図り、さらに、集落の結束を確認し、また「藪」に戻っていく、という循環である。その循環の中で、酒は「晴」に欠かせないものであった。興味あることに、波平恵美子氏は「藪」のエネルギーが枯渇した状態を意味する「藪枯れ（ケガレ）」は「穢れ（ケガレ）」の語源である可能性を指摘している⁷⁾。「穢れ」に陥いると、人は引きこもったり、犯罪を犯したり、自殺を謀ったりするが、波平氏の提言に従うと、その背景には「藪枯れ」というストレス状態があり、「晴」はそれらを防ぐシステムでもあったことにもなり、その席で必ず振舞われた酒に「穢れ」に纏わる不浄なできごとの発生予防の力があるとの評価が与えられたとしても不思議ではない。さらに酒は神との交信のアイテムであった可能性も指摘されている。日本には、それらの酒に対する評価を背景に独特な「飲酒礼賛」の collective consciousness が形成されていったと考える。また、本邦の多くの集会で酒が振舞われるのも、「酒は晴れの席に必須」「飲酒は構成員の再結合を促進させる」という日本古来からの酒に纏わる collective consciousness に基づいた習慣と考える。

大量の高濃度のエタノールを短時間に大量に飲むことはエタノールの血中濃度を高め、その結果死をもたらすことがある。よって、一気飲みは避けるべき行為である。一気飲み自体は決して日本に特有のものではなく、英語圏でも binge-drinking や chug-a-lug のように一気飲みを意味する言葉がある。しかし、日本では、この危険な行為が、特に宴会において推奨、礼賛されるという特調を持つ。

一気飲みに纏わるエピソードとして日本の戦国時代の母里太兵衛の一気飲みがある。文禄の時代に、黒田長政の家臣母里太兵衛が豊臣秀吉の家臣福島正則に呼ばれた。母里は黒田から、

「福島は酒癖が悪いので、酒を勧められても断るように」と注意を受けていた。案の定、福島は母里に酒を勧めたが母里は応じなかった。面子を失った福島は大杯に酒を注ぎ、「これを飲み干せば何でも褒美をやるから飲め」と命じた。それでも母里が断るので、怒った福島は、「黒田の武士はなんと腰抜けなことか」と罵ったが、それに対し、母里は黒田家のプライドを守るために、「ならば」ということで一升大盃を飲み干し、約束の褒美として正親町（おおぎまち）天皇から織田信長、豊臣秀吉と受け継がれ、福島が所有していた名槍「日本号」を要求した。最初、福島は拒んでいたが、最後には渡さざると得なかったという話である。この、酒の一気飲みで日本一の槍を手にしたという所謂 Japanese dream story は「黒田武士（節）」という宴会唄として日本中に広まっている⁸⁾。この逸話は黒田藩の儒教学者、「養生訓」の作者としても有名な、貝原益軒が残した「黒田家臣伝」に記載されている⁹⁾ ので史実と思われるが、例え作り話であったとしても黒田節として多くの日本人が認識したことにより、「一気飲みは素晴らしい宴会芸である」という日本独特の collective consciousness が形成され、その拘束により、危険な行為である一気飲みが礼賛されることになったと推察される。

また、現在、日本の若者の間で、「コール飲み」と呼ばれる一気飲み形態が流行しているようである。その基本型は参加者が歌を歌い、場を盛り上げ、そのサビの部分で指名された者が一気飲みを行うというものであるが、そのルーツは、指名された者が一気飲みを行う際に周囲が「イッキ！、イッキ！」と掛け声を掛けて盛り上げた1980年代の一気飲みのスタイルと考えられる。この「イッキ！、イッキ！」は、1985年に当大学の体育会が受賞者となって流行語大賞流行語部門金賞を受賞している¹⁰⁾ が、この受賞は現代の日本における「一気飲み礼賛」の collective consciousness を強化させたと考える。

4. デュルケームが提唱する自殺の類型と一気飲みの類型

デュルケームは自殺のタイプを4つ（集団本位的自殺、自己本位的自殺、アノミー型自殺、宿命的自殺）に分類し、夫々の類型の頻度と社会の特徴に相関があることを見出した。この知見より、筆者は、自殺が個人の行動であり、違う特徴を持つ社会には夫々違った collective consciousness が形成されるであろうことから、自殺という行為も collective consciousness による拘束を受けていると考えている⁵⁾。尚、筆者はデュルケームが提唱した4つの自殺の類型に、日本人特有の「お詫び自殺」という類型を追加した⁵⁾。さらに、筆者はこの5つのカテゴリーからなる自殺の類型が、そのまま日本人の一気飲みの類型となりうることに気づいた。一気飲みが死と隣り合わせになっている行為であると考え、この重複は十分納得がいく。もっとも、一気飲みの類型を考える上で、筆者は、まず、少なくとも日本には「お詫び一気飲み」があることを思い付き、そこから日本における「お詫び自殺」の存在に気づいた。

1) 集団本位的一気飲み

集団本位的自殺は社会が自殺を強要するものであるが、強要される一気飲みが存在することは自明である。しかし、デュルケームは、集団本位的自殺では自殺を強要する側のみならずされる側も組織と強固な関係を持っており、後者もその強要を是としていることをこのタイプの特徴であるとしている。このタイプの自殺に対応する一気飲みの典型例として、体育会のような構成員間に強固な関係が形成されている組織で、幹部員が指名されて、組織の結束を掲げて行う一気飲みを想定している。また、一気飲みをする時点では、組織と強固な関係がなくとも、一気飲みをすることで、組織への帰属を高めたいという意識が働く場合も、この類型に分類できると考える。同様に体育会の新入生歓迎で、新入生が「宜しくお願いします！」と挨拶をして行

う一気飲みなどである。一方、あまり、強い絆で結ばれていない集団において、地位の上の者（A）が下の者（B）に一気飲みを強要することもあるが、これは、この類型には入らないと考えている。単にAの意向でBに強要しているだけで、自己本位の「一気飲みの強要」であり、これは次の自己本位型自殺の変形と考えている。

2) 自己本位の一気飲み

自己本位的自殺は個人が孤独感や焦燥感から企てる自殺であり、人間関係が希薄な社会で多発するとされる。このタイプの自殺に対応する一気飲みの典型例として筆者が学生時代に目撃した光景をあげる。1980年代のことであるが、当時は、大学のサークルが活動資金集めの一環として、学生を広く集めて行うスキーツアーをよく開催していた。その夜の飲み会で、面識のない人間の集まりであることもあり、周囲に溶け込めず孤立し、一人で一気飲みを繰り返し始め、結局つぶれてしまったというケースを経験した。また、上述した強固な人間関係が構築されていない集団でのハラスメント的一気飲みの強要は、強要する側に孤独感や焦燥感があり、相手を支配すること、相手より上位に在ることを示そうとすることなどを目的とするものであり、自己中心的な飲酒の強要であることからこの類型の亜型として分類した。

3) アノミー型一気飲み

アノミー型自殺という概念は、欲望がどんどん膨らんでいく中で空しくなって自殺とされており、自殺の類型としてはやや難しいが、一気飲みの類型としては理解が容易と考える。即ち、宴会で一気飲みを繰り返し、持て囃されるのを言いことに、欲望にまかせどんどん杯を重ねていく、所謂「お調子者」の一気飲みである。デュルケームはアノミー型自殺は社会的規制が弱い状態で起こる特徴を持つとしているが、確かにこのような一気飲みの構図は、幹部が睨みをきかしている集団

や、部長の教員が出席している会合のように、無言の規制がかかっている会合では起こりにくいと考えられ、デュルケームの理論との合致が見られる。

4) 宿命的一気飲み

デュルケームが提唱する宿命的自殺に対応する一気飲みに関しては、現在のところ見出せていない。生まれながらにして、人生のどこかで一気飲みをすることは定められているという宿命を想定することは困難で滑稽なことと思われる。

5) お詫び一気飲み

最後に筆者が提唱する「お詫び自殺」に対応する一気飲みであるが、この例はよく見られる。有名なものは、飲み会に遅れて来た時に課せられる「駆けつけ三杯」である。これは、遅れて来た人がビールなどをコップ三杯飲む罰ゲームであるが、先に飲み会を始めた人と遅れてきた人の酔いの程度を合わせるという意味に加え、遅れて来た人の謝罪も含有していると考ええる。集団で粗相をして、飲み会で、先輩や上司に「これで許してください。」と一気飲みをする光景も良く見かけるが、これもお詫び一気の典型例である。

飲酒、特に一気飲みが、なぜお詫びになるのかは不明であるが、筆者は西暦200～300年頃に中国から日本に伝わったとされる「曲水の宴」¹¹⁾ という風習に着目している。これは元来、上巳節会という上巳（3月3日）に庭園内の水辺に集まり、小舟を流しながら、詩歌を詠み、穢れを払う宴であったが、しだいに、酒の入った杯を小船に乗せて、その杯が自分の前を通り過ぎる前に詩を詠めなければ罰則としてその杯を空にして空杯を小船に戻すことで許してもらうという遊びに発展したとされる。流れ行く小船に杯を戻さなくてはならないので当然杯中の酒は一気に飲みほされたと推察するが、この風習から「一気飲みが謝罪になる」という collective consciousness が形成された可能性を想定している。鎌倉時代

になると、上巳に紙で人形を作り、そこに自分の穢れをつけて川に流すという流し雛¹²⁾の風習も確立した。流し雛と飲酒の直接の関連性は見いだせていないが、上巳の儀式ということで両者が融合し、「一気飲みが災いを水に流す」という collective consciousness になった可能性を推察している。

もっとも、中国から日本に伝わった四文字熟語に「杯酒解怨」という言葉がある。唐の皇帝肅宗（756年～762年即位）の側近張延賞と軍のトップ李晟の間には多くの因縁があり、二人は不仲であったが、皇帝のはからいで酒を酌み交わしすべてを水に流し、その後は二人で皇帝を支えたという逸話である¹³⁾。この四文字熟語は「飲酒（一気飲みが行われたという記載は無い）が災いを水に流す」ことの明文化であり、飲酒が物事を水に流すとする collective consciousness を強化していると考える。

5. 日本における飲酒と一気飲みの collective consciousness の検証と修正—新しい飲酒問題対策（1）

本稿では、日本における飲酒や一気飲みを礼賛する価値観の背景にある collective consciousness をいくつか同定（collection）した。この同定は我々がなぜ飲酒や一気飲みをするのか？という疑問に答える上で有益である。一方、筆者はこれら collective consciousness を形成した逸話、概念などが、不正確に現代に継承されていたり、状況が変化しているに拘わらず「飲酒・一気飲み礼賛」という結論のみが形骸化し一人歩きしているケースもあると想定している。それを検証し、もし正確に伝承にされていない場合はそれを修正（correction）することで飲酒者の「飲酒・一気飲み礼賛」の価値観を修正できる可能性があると考えている。

本稿では、酒が「晴」の必須アイテムであり、そこから飲酒礼賛の collective consciousness が形成された可能性に言及した。しかし、ここで、

飲酒は「褻と晴の循環」の中で礼賛されていたことを忘れてはならない。現代社会では毎日飲酒をする人もおり、少なくとも飲酒に関しては「褻と晴」の区別がつきにくくなっている。褻と晴の循環を前提とした「褻枯れ対策」（波平恵美子氏⁷⁾の提言に従えば「穢れ対策」、即ち、引きこもり、犯罪、自殺の予防、さらには、集団の再結合）として礼賛された飲酒であるが、その前提が崩れた状況ではその礼賛はそのまま通用しない。さらに言えば「褻と晴」の循環から逸脱した毎日の飲酒は「乱用」と言える可能性もある。20世紀には「ノミ（飲み）ニケーション」という造語があった。これは、日本の企業人達が団結し世界経済を席捲した成功の一部に飲酒（飲み会）が寄与していたこと、即ち、飲酒がコミュニケーションツールとして有用であったことを意味する言葉である。しかし、日本経済の発展のために身を粉にしてがんばられた方々には大変失礼ではあるが、その時代のライフスタイルとして「褻と晴」の循環は想定されておらず、寧ろ、毎日の飲酒により毎日を「晴」、即ち高揚した状態にして、その勢いで仕事をされていた方もおられると考える。しかし、その構図は、日々気分を高揚させるという意味で、覚せい剤使用の構図と共通であった可能性も否定できない。飲酒が礼賛される背景の「褻と晴」の循環という古来日本の慎ましい生活スタイルがあったことを忘れてはならない。

次に筆者が修正を必要と考える collective consciousness は「黒田節」に現れる母里太兵衛の一気飲みである。一升の大杯を空にしたとされるこの逸話では、母里は何を飲んだのかは不明のままである。15世紀頃よりアルコール度数の高い沖縄の蒸留酒である泡盛が日本にも入っていたが、母里太兵衛の時代にはあくまでも権力者への奉納品であり¹⁴⁾、貴重品であったと考えられる。よって、彼が飲み干したものは当時広く流通していた日本酒と考えるのが妥当であろう。その日本酒のエタノール濃度であるが、現代の日本酒は10～20%であるものの、

江戸時代の日本酒の濃度は5%程度という推測もあり¹⁵⁾、安土桃山時代の日本酒の濃度も現代のものに比べ、より薄かった可能性もある。もっとも現代の日本でも日本酒一升の一気飲み大会というものが存在する¹⁶⁾ので、当時の日本酒のが現在の日本酒と同程度の濃度であったとしても、母里の一気飲みは実行が可能なものであったと考える。尚、製法上、蒸留酒である日本酒ををそれ以上の濃度にすることは現代でも難しく、母里が現代の日本酒より濃い日本酒を飲み干したことは考えにくい。現代の日本では、この母里の逸話に始まる一気飲み礼賛に従って、現在流通している、40%の蒸留酒の原液の一気飲みも行われているが、日本に形成された一気飲み礼賛には、そのことは想定されていないことを認識することが重要である。

またこの逸話の中で地位が上の者が下の者に飲酒を強要することで、上の者は日本号を失うという非常に大きな痛手を被ったものの、その強要自体行は否定されていないので、アルコールハラスメントを許容する collective consciousness になっている可能性もあり、その注意も必要である。

同様に、「お詫び一気飲み」の collective consciousness になっている可能性を示した「曲水の宴」における一気飲みであるが、これはお猪口程度の小杯の酒を空にするだけなので、飲酒量としては非常に僅かであったことの認識が必要である。

更に、「イッキ！、イッキ！」の掛け声に対する1985年の流行語大賞授与に対しても何らかの考慮が必要と考える。上述の「（筆者が乱用と考える）ノミネーション」の時代の受賞であり、世の中全体が高揚していたため、この選考結果は当時の collective consciousness を鑑みると、妥当なものだったと考えるが、一気飲みで死者が出ていることを考慮すると、識者やこのイベントの主催者から社会に向けた何らかの発信があるべきであろう。また、大学の体育会が受賞していることから、一気飲みを行うに

しても、「体育会のような統制がとれた厳しい管理の下での度が過ぎない一気のみを想定している」と修正を加えることも可能と考える。しかし、上述のASKの報告に大学体育会で発生した死亡事故もいくつか報告されているのも事実である¹⁾。

6. 一気飲みの類型と飲み会を行う集団の特長の関係—新しい飲酒問題対策（2）

本稿で示したもう一つの所見は、筆者が修正を加えたデュルケームの自殺の類型がそのまま一気の飲みの類型にあてはまるということである。デュルケームはそれぞれの類型の自殺が起こり易い社会の特徴を示しているが、今回、同様の関係が一気飲みの類型とそれが行われる集団の特徴の間でも成立しうることを示した。その推定に基づき、宴会を行う集団の特性と個人の特性の組み合わせの中から、各種の飲酒事故が起こり易い組み合わせを絞り込むことができる。即ち、集団への帰属意識が高い者が個人と組織の絆が強い集団で飲酒する場合に「集団本位」の事故が、孤独に弱い者や孤独になると焦り易い者が人間関係の希薄な集団で飲酒する場合に「自己本位」の事故が、調子に乗りやすい者が規制の弱い集団で飲酒する場合に「アノミー的」な事故が、さらにおそらく社会的な特徴に関係なく、懲罰意識の高い者が飲酒する場合、「お詫び的」な事故が、夫々起こり易いと推察する。また、別稿²⁾で述べたように日本人の「お詫び」の一部は羞恥心で、さらに羞恥心の一部は集団から排斥されることへの不安感があるとすれば、そのような不安感が強い者も「お詫び的」事故を起こすリスクが高いと考える。

今回提示した所見は、各人が自分と飲酒集団の関係、即ち自己と社会の関係を考察すること、その結果、両者を良く知ることが飲酒事故の危機回避につながることを意味するが、この「自己と社会を知ること」は本分野の教育のみならず、教育全般の原点であってしかるべき

である。また、すべての飲酒事故にあてはまるかは不明であるが、若さ故、上述したいくつかの性格上の未成熟な部分に飲酒事故の悲劇が入りこむ可能性も想定される。学生の飲酒事故防止のためには、各人の性格の成熟も重要と考える。しかし、これらの部分の教育は知識や技術の取得に重点が置かれる現代の教育の中で置き去りにされているとう印象も持っている。

おわりに

飲酒事故防止の最も確実な対策は、アルコール飲料を社会から抹殺することであろう。しかし、アルコールと人類の長い間の関係からそれは不可能で、当大学では学園祭からの排除も難しい状況である。よって、飲酒問題教育のスタンスは「アルコールと付き合いながら危険飲酒を防ぐ」ということになり、その縛りのために、過去の飲酒問題教育では「乱用は危ないのでやめよう」と訴えることに終始していたと考える。実際筆者が大学で展開している講義も同じようなレベルでであったが、筆者は本稿で示した、デュルケームの理論に基づく飲酒問題への新しいアプローチが飲酒教育の新機軸を打ち出すポテンシャルを有していると考えている。今回、その理論展開の中で、筆者は、自己を知る、社会を知る、自己を成熟させる、ことが飲酒事故防止に重要であるとの結論に達したが、これらの部分の教育は現代の日本の教育の中で置き去りにされているの部分であるとの印象も持っている。

文献

- 1) アルコール薬物問題全国市民協会ホームページ.
https://www.ask.or.jp/ikkialhara_cace.html (cited 2018-2-20)
- 2) エミール・デュルケーム. 社会学的方法の規準 (原著1895年, 宮島喬訳). 岩波書店; 東京: 1978.
- 3) エミール・デュルケーム. 社会分業論 (原著1893年, 田原音和訳). 筑摩書房; 東京: 2017.
- 4) エミール・デュルケーム. 自殺論 (原著1897年, 宮島喬訳). 中央公論社; 東京: 1985.
- 5) 横山裕一. デュルケームの集団的意識による個人行動の拘束の理論および自殺論の解説—飲酒問題の理解のための新しい手引きとして. 慶應保健研究 2018; 36: 47-51.
- 6) 柳田國男. 明治大正史 世相篇. 講談社; 東京. 1993 (1931の再版).
- 7) 波平恵美子. ケガレの構造. 青土社; 東京. 1984.
- 8) 月桂冠ホームページ.
<http://www.gekkeikan.co.jp/enjoy/bunko/kurodabushi.html> (cited 2018-2-20)
- 9) 京都観光 Navi.
<https://kanko.city.kyoto.lg.jp/detail.php?InforKindCode=10&ManageCode=2176> (cited 2018-2-20)
- 10) 日本俗語辞典.
<http://zokugo-dict.com/02i/ikikiikki.htm> (cited 2018-2-20)
- 11) 曲水の宴. 改訂新版 世界大百科事典 (加藤周一編集). 平凡社; 東京: 2007
- 12) 流し雛. 改訂新版 世界大百科事典 (加藤周一編集). 平凡社; 東京: 2007
- 13) 四字熟語. 杯酒解怨.
<http://yoji-jukugo.com/%E6%9D%AF%E9%85%92%E8%A7%A3%E6%80%A8/> (cited 2018-4-3)
- 14) ウィキペディア. 泡盛
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B3%A1%E7%9B%9B> (cited 2018-4-3)
- 15) 小泉武夫. 酒肴奇譚. 中央公論社; 東京: 1997
- 16) JCAST ニュース. 高知「日本酒一升」イッキ飲み大会—「伝統」と「危険」の賛否両論.
<https://www.j-cast.com/2017/05/01296983.html?p=all> (cited 2018-4-3)